

2010年
11月22日
月曜日

栗田匡相 助教（開発経済学）

君が世界を語るように、語れるように

だったということなのだろう。自分にとつて初の沖縄はそんな天気の中で始まった。

明るる日のバスでの移動中、学生達が夜更かしの影響で爆睡をしている中、不思議なことに私一人だけが睡魔にもおそわれず、車窓を流れる景色に惹きつけられていた。何か際だって特徴的なものがあるというわけではないのだが、さりとて内地の景色とはまるで違う沖縄の自然を眺めていると、何か恍惚とした気分が沸き立つてくるから不思議だ。片道3時間、往復6時間という移動時間が全く苦にならなかった。

沖縄には、インドには、ガーナには、自分が知らない色があり、臭いがあり、温度があり、湿度があった。どうやらそうした生の雑音（ノイズ）の振幅が大きい時に、こうした官能的ともよべる感覚が出現する

「コミュニケーションを始める入り口には、二つあることになる。一つは、自分の目にするものと考ええることを客観化し、それを共通の合理的な言説によって言い表し、語らるべき内容の代表者ないし代弁者として、他者と同等かつ交代可能な人間として語る方法である。そしてコミュニケーションへのもう一つの入り口は、本質的なのは、きみ自身、きみが何かを語ることだという状況である」 アルフォンソ・リンギス

これまでの人生において飛行機に何度搭乗したのかを数えてみようとしたが、正確な回数はわからなかった。ただ少なくとも100回以上は乗っていることは間違いないだろう。飛行機は実はあまり好きな乗り物ではないのだが、大学生の頃から、バックパッカーと称して色々な

ところへ出向いてしまったもので、定員が数名のプロペラ機にも乗ったし、ミャンマー上空1万メートルを飛行中に、けたたましいサイレンとともに「エンジンの故障で引き返す」という英語のアナウンスを聴くことになった。このときは自分の英語力の無さ故に引き返すまでの1時間程度の時間を冷静(?)に過ごせたものだ。最近の記憶に残るフライトといえば、去年(2010年)の11月にゼミ合宿で沖縄に着陸するときの雨(スコールと呼ぶべきか)はものすごいものだった。学生の前では平静を装っていたものの、心の中ではパイロットの運転技術に密かに拍手を送っていた。那覇の空港に降り立ち、スコールをより直接的に感じざるを得なくなった皆の顔には不思議なことに笑顔があった。笑うしかないほどの予想を超えたスコール

らしい。そう言われてみれば、バス移動の前日に食したヒージャー刺し(鹿肉)には、こうした異界へ迷い込むための呪術的な香りが漂っていた(おおげさか)。人間に限らず、植物や風景、更に言えば温度や湿度といった目に見えない空気感までも含めて、それら他者との「出会い」は、我々、人間に喜びをもたらす。そしてそうした「出会い」は、おおむね予測不能なものが多く、あるいは予測が不能な出会いほど、より官能的な喜びを我々にもたらすのかもしれない。なるほど、人間にとつて重要なことは世界が計り知れないことで満ちていると言うことであり、それに出会うために出かけることが出来るということなのか。あのスコールをくぐり抜けて降り立った沖縄との出会いは、そんな想いを私に与えてくれた。「感謝」である。■